

会長挨拶

宮下 英雄



私は現在、聖徳大学にて学部生，大学院生に，自然科学，理科教育学等を指導しているほか，質の高い，専門性のある教師職を育てております。また，幼少の時期から，科学的な素養を培うことの重要性を目的にし，実感のある科学体験を，特に親子のコミュニケーションを図りながら行うNP0法人「子ども科学教育振興協会」の理事長をしております。

今年の夏は，新聞やニュースでかつて見たことがない活字が登場しました。それは，猛暑を飛び越して，極暑，さらには，激暑という文字です。暑さの日本一を争うまでもありました。その中，夏休みも最終段階になりましたが，全国各地より多くの皆様方のご参会をいただき開催できますことに感謝を申し上げます。

さて，この研究会も第15回という歴史を積み重ねてまいりました。その間に，「動物飼育と教育」というタイトルの会誌を16号までに発行を積み重ねてまいりました。

日本獣医師会の諸先生方におかれましては，日頃より，学校教育に暖かなご支援をいただいておりますことに心より御礼を申し上げます。お陰様で，獣医師会と教育関係者の支援ネットワークの広がりが見られ，学校や園と連携し合い，一体となって，動物飼育の教育的価値等につきまして，実践事例を通して研究発表と協議を重ねて参りました。

特に，子ども達の生命尊重と動物愛護についての実感を伴った見方や考え方の育ち，向社会性，自己達成感，自己肯定感，自尊感情等についての変容等に大きな成果が報告されているところです。

本日ご講演をいただきます文部科学省教科調査官であられます，田村先生には「飼育活動が育てる子どもの心」と題してご講

演をいただきます。動物飼育の継続による子供の変容等につきまして，さらに深いご見識に基づいて，ご示唆をいただきたく存じます。お忙しい中，ご講演をいただきますことに感謝を申し上げます。

この研究会は平成16年に発足してちょうど10年を迎えました。発足当時の状況と積み重ねてきた研究の成果と現在の状況からの課題等についてお話させていただきますと発足当時は，鳥インフルエンザが猛威のときでしたが，その当時は，鳥インフルエンザという病名さえも一般社会ではよく認識されておらず，毎日のようにテレビ，新聞にて，その被害の大きさと広がり，勢いと速さについて報道がなされておりました。

その影響を受けて，学校で飼育しているニワトリも，感染するという事で，飼育小屋から，急に，子どもの姿が見えなくなってきてしまいました。

当然，可愛がって世話をしてきたニワトリなどが死を迎え始めました。「ニワトリが死んだ」この事実は，鳥インフルエンザに感染して死んだという誤解を招き，子どもたちも飼育担当の先生方も更に，飼育小屋に近づかなくなってしまいました。

ニワトリの死は，インフルエンザによるものではなく，餌をあげなかったための「餓死」でした。生命尊重，動物愛護の教育的価値を目的にした我が国固有の教育活動の一つでした飼育活動が，突然ストップしてしまったかのような状況下に落ち入りました。

おりしも国内では，かつて経験したことがなかった，人間の尊い命が奪われる猟奇的な事件の連続発生やいじめが社会問題として依然として根深く存在しているときでした。

飼育体験を通して，豊かな心，学ぶ意欲，生きる力を育てたい，子どもたちの優しさ，思いやり，人間らしさを取り戻したいという切なる願いから，動物飼育と教育のかかわりの研究会が発足し，獣医師の先生方と教育関係者のネットワークの構築が始まりました。

10年前の発足会の中で，本研究会の顧問であります東京大学名誉教授の唐木英明先生（現倉敷芸術科学大学学長先生）は，そのご挨拶において，「日本獣医師会の中で，学校飼育動物に関する問題が出ている。比

較的最近出てきた問題であるが、この問題にどう対応すればよいのか迷いがありました。

というのは、飼育動物の問題は、学校の先生が中心であって、獣医師がそこにどの程度手を出しているのかわからなかった、つまり、獣医師と学校の先生との接点が全くなかった。接点がないからと言って何もしないわけにはいかない。伴侶動物の診療をしている獣医師、小動物獣医師会を中心にして、学校飼育動物についての支援が始まりました。

そして、この問題を獣医師の世界だけでなく、社会に向けてこの問題の重要性をアピールし、支援する方向で考えていきたい。」と熱い心で語っていただきました。

ご承知の通り、学校教育の世界には、獣医師の資格を持った専門家は誰一人もおりません。このような中、とりわけ教育界と獣医師会の接点を精力的、情熱的に導いてくださったのが、事務局長をしてくださいました中川美穂子先生です。

先生のご功績があつてこそ、現在の研究会がここまで充実・発展・継続してきたと言っても過言ではありません。

現在、中川先生は、ご病気をされ、入院加療中であり、ご退院されたところですが、引き続き加療が必要な状況にあります。早くご快復をされ、元気なお姿とご指導をいただきたく切に願うところです。

発足会ののち、日本獣医師会・五十嵐会長様から、研究会への期待と称して、玉稿をいただきました。

その中で、「青少年の重大な犯罪が多発し、心の荒廃が指摘される中で、幼少年期の心の健康をいかに維持していくかについては、国民的な課題です。日本獣医師会は学校における動物飼育を介した教育が、子供たちの心の成長に有効であることに着目して、動物の専門家である獣医師が適切に指導することについて文部科学省に提言を行うとともに、教員と獣医師が互いの立場を理解して、それぞれの持てる能力を結集し、相携えて子供たちの心の育成に有効な方策を検討し、推進する必要がある」と寄稿してくださいました。

そして、最後に、学校関係者の方々は、ぜひ気軽に獣医師、獣医師会の相談してくださいとありました。

このように獣医師会の皆様方は、発足以来、学校からの要請に常に前向きにこたえようとしてくださっております。現在の学校における、動物飼育をめぐる現状はどうでしょうか。お陰様で、獣医師の先生方と連携をとりながら飼育活動に専念している学校が増加してまいりました。

しかし、その一方、鳥インフルエンザ対策を逆手に取り、今日まで飼育舎には、一匹の動物の姿もなく、物置化している学校の存在が目にとまります。

動物飼育の現状が、極端な二極化をしているのではないのでしょうか。

「くさい、汚い、世話が大変」ということで、これ幸いにと、動物飼育活動を中止している学校があつたら、どんなに悲しいことでしょうか。

生活科学習指導要領の改訂においては、動物飼育については、「生命の尊さを実感を通して学ぶ観点から、継続的な飼育を行うようにする」として示されています。動物不在の学校は、いかにして、この課題を推進しようとしているのでしょうか。

この研究会を通して、また、文部科学省や教育委員会を通して、前向きな指導が必要かと考えています。実践上の大きな課題が見え始めています。

さて、大きな課題が見えてきたところですが、10年を経てきた、この研究会の組織等についての検討を進めてきていました。会長職ですが、発足以来10年間、私、宮下が務めてきましたが、このような高齢化人間になってきましたので、この研究会の更なる質的な向上を願うとともに、引き続き円滑な運営等を図る必要性から、会長職を、現副会長の鳩貝太郎先生に、委嘱をしたいと思います。

鳩貝太郎先生は、国立教育政策研究所統括研究官をご退任され、名誉所員、首都大学客員教授をされ、現在、生物オリンピックの日本の事務局長をされています。生物教育界の重鎮でありますので、本研究会のさらなる質的な向上が期待できると思います。鳩貝先生よろしくお願いを申し上げます。

最後になりますが、お忙しい中、ご臨席をいただきました、ご来賓の諸先生方に改めて感謝を申し上げますとともに、引き続きご支援いただきますようお願いを申し上げます。ありがとうございます。

また、本日、口頭発表、パネル発表をさせていただきます発表者の方々、全国からご参会いただきましたすべての皆様に感謝をもう上げますとともに、10年間会長職を支えてくださいました、日本獣医師会の諸先生方、文部科学省をはじめ、教育界のすべての皆様に深く深く感謝を申し上げます。挨拶と致します。ありがとうございます。

(前聖徳大学大学院教職研究科教授／
NPOこども科学教育振興協議会理事長)